



Egg donor market in Ukraine.

ウクライナにおける 卵子ドナーのマーケット

Interviewee

Dr. Polina Vlasenko

Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門、関心領域を教えてください。

インディアナ大学で医療人類学の博士号を取得した。学位論文はウクライナにおける卵子ドナーのマーケットについてだが、代理出産についても触れた。というのはウクライナでは卵子ドナーが代理母になることもよくあったから。

ウクライナの卵子バンクや不妊治療クリニックを1年以上にわたって観察研究した。一時期、そこで雇用されていたこともある。

ウクライナ人女性から採取された卵子は、海外で不妊治療に使用されていた。卵子が不足していたり、卵子提供が合法ではない国に輸出されていた。

人体資源マーケットや女性身体の商品化・医療化について関心がある。いかに女性が労働者とみなされているか、ビジネスがいかに組織化されているか、卵子がどのように商品化されているかを研究している。

Q. 研究対象者との信頼関係(ラポール)を十分に築くことができましたか？ 調査研

究をするうえで、難しかった点はありませんか？

研究では、二つの集団に着目した。一つは、卵子ドナーと代理母、もう一つは、医療専門職とエージェントで、いろいろな地域にある計8つのクリニックを調査した。

私自身が女性であることや、インタビューをしたほとんどの代理母と年齢が近いこと、共有できる経験があり、女性たちとラポールを築くのは難しくなかった。私の存在は彼女たちにとって威圧的ではなかった。

ただ、当時、私には子供がまだいなかったため、そこは違っていた。ウクライナでは代理母になるためには自分の子供が少なくとも1人いる必要がある。

しかし、私は労働者階級のシングルマザーの母親を持っているので、彼女たちと共通性を見出すのは難しくはなかった。

対象者は主にソーシャルメディアを通して見つけた。彼女たちの声を取り上げられることは少なく、自分の経験を話す機会を強く欲していた。

医療専門家やエージェントの場合、それよりは少し難しかった。私にとってよかったのは、この専門領域はかなり女性化されているので、医師なども女性が多かったこと。彼らは私の存在を、ビジネスを発展させる機会だと捉えた。つまり、彼らはプロトコルに従って高品質のサービスを提供しており、非常に透明性が高いということを世界に示すことができると考えた。

彼らは、私がクリニックに毎日通ったり、ビジネスのためのスタッフミーティ



ングに参加したりするのを進んで受け入れてくれた。学位論文は書籍として出版することになったので、昇進をえるまたとない機会になった。

もちろん、私自身がウクライナ人だったこともある。最初、私は卵子バンクやクリニックをしばらくの間、観察していただけだったが、スタッフは忙しく、私にも仕事をふってきた(特に、私は英語が得意だったので)。しばらくして、臨時の従業員として雇われた。

最終的に、私が得た考察を彼らにシェアしたとき、彼らは、私が代理母や卵子ドナーの仕事を労働と位置づけたことに不快感を示した。

利他主義のナラティブはウクライナのクリニックでも、外国人向けなど対外的に非常に強調されており、彼らはそのナラティブが支配的であることを望んでいた。一方、卵子ドナーや代理母自身は、それを仕事だと思ってやっていたのだが。

Q. ウクライナ人の卵子はなぜ人気があるのでしょうか?

医療専門家によると、次のような理由がある。

- 1) ある種のカップルに対して、アクセスを禁止している国がある。
- 2) アクセスはできるが、待ち時間が長い。
- 3) ローカルの女性による提供が不足している(大抵の場合、利他的とされており、提供するインセンティブがない)。

さらに、ウクライナの法律はとてりべらる。大量の卵子を採取する。女性たちは大量の卵子を喜んで差し出す。報酬があるから。卵子提供は極めて魅力的。ウクライナでは失業率が高く仕事を探すのが難しいし、仕事があっても、給料が少なく暮らし向きはよくなるらない。つまり、卵子はいくらでもあるということ。

人種もまた重要な因子。依頼者の多くが白人で、白人の卵子を求めている。そして、白人の卵子が豊富にある場所は少ない。そのうえ、値段がそれほど高くはない。

例えば、米国の卵子はウクライナより10倍高い。全体的に見て、こうした要因が複合して、ウクライナ人の卵子は世界的に人気となっている。

Q. ロシア・旧ソ連の国々における女性の役割と、卵子提供、代理出産はどのように関係していますか?

簡単には答えられない。ソビエト時代に遡れば、旧ソ連の国々では、女性は二重の負担を抱えていたということ。女性は常に仕事をしていて、職場に女性の労働者は多かったが、家庭での労働、つまり、子供や老親の世話、家事もまた女性の責任だった。こうした文脈では、女性は、再生産労働を無償でやり、加えて賃労働もやるといったように、ある種のヒーローとみなされていた。

研究によれば、男性たちは、社会主義から市場経済への変化に適応することができなかったことが示されている。多くの男性がアルコールに溺れたりして、大



黒柱の役割を果たすことができなかつた。その結果、女性の肩に家族を養う重荷がかかった。

資本経済下で生き延びるために三つの仕事(賃労働、家事、子育て・介護)をする女性のイメージは、旧ソ連の国々に共通する特徴になっている。これらの国の女性たちにはなかなか仕事がなかった。だから彼女たちは子供を育てるためなら何でもした。それは、男性は頼りにならず、女性はシングルマザーになることが多いという社会的な物語^{ナラティブ}とパラレルに生じている。離婚率はかなり高い。

こうしたナラティブが、卵子提供や代理出産を一種の仕事として行うことを正当化している。卵子提供と代理出産があるお陰で、女性は家族の大黒柱として、家族の将来をよくするためにアパートを購入したり、教育に投資したりすることができる。また、これらは非常にフレキシブルな仕事で、子育てと両立することができる。だから女性は、女性の責任とみなされる女性化されたタスクを遂行しつづけることができる。子育てと仕事を両立でき、ロシアや旧ソ連の国々でポピュラーとなっている、ヒーローのナラティブを再生産している。

Q. 卵子ドナーや代理母になったウクライナ人女性は、産まれた子どもとの関係について、どのように想像していましたか?

卵子ドナーと代理母とで、反応は異なっている。

卵子ドナーはたいていの場合、卵子から心理的に距離を置いている。生理が来るたびに卵子を失っているのだからと。

それは、“卵子提供していなければ、どのみちトイレに流していただろう”などと表現される。クリニックで採卵して売らなければ無駄になるという見方。

このナラティブは、クリニックによっても補強されている。医学的、技術的な進歩をつかって卵子を取り出して商品化しなければ無駄になるだけだと。

同時に、将来のことを考えて、提供したことを後悔する女性もいた。提供した卵子がその後、どうなったかわからない。だから、自分が提供した卵子から子供が産まれたかどうか、確認することはできない。それはつまり、こういうことだ。自分の子供が将来、卵子提供で産まれた子供と出会い、ロマンスに落ちることがあるかもしれないという心配が、あるといえはる。

とはいえ、多くのウクライナ人女性が外国人のカップルに提供するので、子供たちが将来、出会うかもしれないという懸念はそれほど強くない。

代理母の場合は、それとは異なる。彼女たちは妊娠して出産するまでの長い間、関わるから。

責任ある労働者として、報酬を得るために、ドクターの指示にきちんと従う努力を怠らない。多くの女性が、プロセスに投入した努力にくらべて、報酬は十分ではないと語った。しかしそれと同時に、それは自分たちの赤ちゃんではないし、愛着を感じたくはない、そして将来どうなるかを知りたいとは思わないと話す(しかし実際にはそれを強く望んでいるのだが)。ほとんどの女性が、出産後も依頼者とコミュニケーションをとり続けたいとは思わないと話す。



Q. ウクライナ人の卵子ドナーや代理母は依頼者の家族と親密な関係性を持つことを望んでいますか？

二種類の代理母がいる。

一つは、依頼者と関わることなく、できるかぎり独立していたいという代理母。

もう一つは、依頼者とその後の人生の中である程度の関わりを持ちたいという代理母。

後者の方が多い。なぜなら、依頼親の気が変わって、自分と赤ん坊を置いて彼らが去ってしまうのではないかと心配しているから。

多くの女性が、複数の子供をすでに持っているので、赤ん坊が産まれたあと、依頼者が自分たちを置いて去ってしまうようなことがあるとすれば、それはとても恐ろしいことだから。

契約がきちんと果たされるよう、カップルが目の前に存在していることを確認したい。また、自分たちが気にかけているということを感じていたいということもある。

エージェントが間に入って、問題を回避するために、依頼者と代理母の間に距離を作り出すなど、色々と調整ができる。

Q. ウクライナ人の卵子ドナー・代理母の不安定性(precariousity)はどのような点に表れていますか？

ウクライナ人の卵子ドナーと代理母の不安定性は、多くの面に現れている。

1) 卵子提供について。ホルモン注射やその

他の医療措置を伴う。採取される卵子の数にはばらつきがある。多かったり少なかったり。これらは、健康にネガティブな影響を及ぼす可能性がある。卵巣の痛みや卵巣嚢胞、卵巣が捻れたり腫れ上がったりすることが数多く報告されている。ホルモンの変動で皮膚や歯、髪、体重増加などもある。

2) 代理出産について。妊娠出産にはリスクがある。多胎妊娠の際、一つの受精卵を中絶すれば、残りの受精卵が影響を受ける。流産もある。7ヶ月の未熟児を産んだ女性の例を知っている。減数手術を受け、その後、早産になった。最終的に彼女は報酬をもらうことができなかった。

3) エージェントの問題。契約書が曖昧なことがある。卵子提供の場合、簡単な同意書だけなので、エージェントには責任がない。代理出産のリスクは、代理母に対して完全に説明されていないことがままある。流産や妊娠に失敗した場合、報酬を受け取ることができないといったこともよくある。

もし、妊娠後期の流産の場合には、何がしかの金銭が支払われることもあるが、それ以外の場合は、全くない。医療上の合併症などいくつかに対しては補償を支払わないと契約書に記載されている場合もある。

また、エージェントは公式に登録されているわけではない。だから、問題が起こった途端、消えうせてしまうエージェントもある。

4) クリニックの問題。治療がきちんと機能するようプロトコルとライセンスがあるが、実際に投与される薬剤の量は



決まっておらず、クリニックによって異なる。これを政府に報告する義務はない。ほとんどの女性が過剰刺激を引き起こすくらい高用量のホルモンを投与するクリニックもある。

ほとんどの医療専門家はリスクを理解しており、特定の状況を避けるために自分たちの医療行為に規制を加える必要があることを認識している。例えば、1度に移植する受精卵の数を制限することや、サービスを受ける女性の年齢を制限すること、仲介するエージェントをライセンス制にすること、非倫理的な行いに対する処分など。

多くの医療専門家が、毎年のように多数のサイクルを実施している大規模なクリニックだけがサービスを提供すべきであると主張している。現在は、小さなクリニックでも施術しており、体外受精の手順を安全に行うための十分な経験や設備がない可能性がある。パートタイムのスタッフしかいない場合もある。この規制の欠如は、女性に不安定をもたらしている。

- 5) 法的保護の欠如。契約書は、代理母と依頼者、双方のためだけの文書。報酬や、健康リスクや医療面に関して、国が強制する規則はない。卵子提供についても同じ。しかし、卵子提供の場合は契約書すらないことがほとんど。女性の間で評判の良いクリニックを選んで、そこが最善だと信じるしかない。

Q. 中国人は、ウクライナでの生殖ビジネスの消費者として、どのような特徴が見られますか？

中国人の顧客についてはそれほど詳しくない。というのは直接、中国人のカップルと話したことはないから。自分が働いていた卵子バンクが、アジア市場にフォーカスしようとしていたことは知っている。中国やその他のアジア地域から、白人以外の遺伝子を求める人たちが一定数いるので、ウクライナの卵子バンクはアジアにあるバンクと取引をしていた。

その卵子バンクは、海外からの卵子を調達するためのハブになりつつあった。クリニックは様々な卵子ドナーを惹きつけようとしていた。中国人顧客による需要が強く、アジア系の遺伝子を持つ人口集団がいるロシアでは、その動きはもっと活発だった。

中国で代理出産を提供しないかと提案されたウクライナ人の代理母もいた。しかし、自分が話した女性のなかでは、条件が悪かったので、誰もそのオファーを受けなかった。ウクライナでは、代理母に支払われる報酬は1万5千USドルで、中国でやれば3万USドルになるが、代理出産の間、ずっと中国に滞在しなければならないため、女性たちは恐れを感じた。しかも、中国では代理出産は合法ではないため、危険だ。

Q. ウクライナで、利他的なナラティブは見られますか？ それは、どのような役割を果たしていますか？

利他主義のナラティブが溢れている。それは母親の幸せをめぐるもの。つまり、代理母は、他の女性が“母親としての喜び”を経験するのを助けること、それ



が彼女たちの主な使命だとされる。女性同士の連帯のナラティブも強い。

一方、クリニックの内部では、スタッフはマーケットやビジネスの言葉でプロセスについて話していた(収入、費用、利益、売り上げを達成するために必要な患者数、会計など)。彼らは、確実な労働力を欲しており、責任ある労働者の倫理を女性に持たせるために、企業への忠誠心を利用する。しかし同時に、利他主義について話し、卵子ドナーや代理母になる女性の経済的動機を軽視し、彼女たちの利益を顧みない。代わりに、クリニックは単に医療措置を提供しているだけであること、そしてそれは女性たちの高潔な行為(女性同士の助け合い)によって支えられていることを強調している。

ほとんどの女性は、金銭が目的であり、ほかの女性がポジティブな経験をしているか、守られていると感じているかどうかを知るために、クリニックのレビューを見ている。しかし、リクルート・キャンペーンの間、クリニックは依然として利他主義のナラティブを全面に押し出している。このナラティブが実際どのくらい効果的なのか、疑問だ。

Q. Covid-19による国境封鎖で、大きなスキャンダルがウクライナの代理出産業界にもたらされました。今後、法律は変化するでしょうか。

これらのスキャンダルは、何の変化ももたらさなかったように見える、だから将来的にも変化をもたらさない可能性が高い。不満の種があるのは間違いない。そして、こういうことが起こるたびに動

きや議論があるが、実際の変化につながることは滅多にない。いくつかの法律があるが、さまざまな分野(家族、子供、医療など)に分散している。エージェントとクリニックにはそれなりの自由があり、彼らは様々な方法で独自に活動している。

医療専門家は、業界を規制する包括的な法律の導入を求めてロビー活動を行ってきた。代理母も、自分たちが十分に保護されていないと感じている。しかし、その後、もし国家が介入すれば完全に禁止されてしまうのではないかという懸念が双方に広がっている。これはジレンマであり、もしそんなことになったら、医療セクターも代理母も両損になってしまう。すべてのスキャンダルは、関係者全員をこの状況に投げ入れる。彼らは法律を提案し、ある種の規制を強く望んでいるが、全面的な禁止を恐れている。

Q. 代理母のグループ(The power of mothers)はどのような活動をしていますか。代理母のエンパワーに役立っていますか?

元代理母がこのグループを組織した。彼女は、さまざまな組織が提供する契約書の条件について代理母たちが共有するために、代理母を支援する組織を作った。これにより、良い契約と悪い契約を見分けて、良い契約を選ぶことができる。元代理母は、代理出産の分野で働く弁護士とも協力している。

私は、これまでいくつかのウェビナーに出席し、契約書にどのような条件が書かれるべきか、そして契約書に署名する



際に注意すべき落とし穴について説明した。興味深いことに、**The power of women**を創立した女性はその後、自分のエージェントを設立した。彼女は、彼女に連絡してきた不妊症のカップルのために代理母を見つけて紹介している。元代理母や元卵子ドナーが女性をリクルートして業界に紹介する仕事を始めるのは、実際、この業界ではよく見られることだ。現在はエージェントとして、彼女は経済的利害を持ってこの業界に関わっている。この業界でお金を稼ぎながら女性たちをエンパワーしている。

女性たちは、**Facebook** グループを利用して互いにコミュニケーションを取り、契約書などについて学んでいる。

Q. 今進めているプロジェクト、今後やりたい研究など。

生殖補助医療の分野で研究を続けている。現在の職場では、客員で教えている。今は、幼児がいるので、フィールドワークをしていないが、夏に何か始めたいと思う。2022年5月に現在の仕事を終えたら、次のプロジェクトを実施する計画を立てている。

1. ウクライナとジョージアの代理出産の比較。どのようにして市場経済に移行したか、その社会的条件、ジェンダー規範、生殖補助医療の法律などについて比較する。
2. ウクライナとスペインの卵子提供の比較。スペインは卵子のもう一つのハブであり、利他的なナラティブが存在する先進国の市場。ウクライナでは、卵子の商品化はより簡単だが、スペイン

は、EUの一部であるため、秘匿されている。卵子の商品化が2国間でどのように異なるかを調べたい。

スペインの卵子マーケットについて、多くの仕事をしているスペインの研究者と一緒に論文を書いているので、フィールドワークをするために今後、数年のうちにスペインに行きたいと考えている。

(2021年12月)



Dr. Polina Vlasenko

University of Akron 客員助教

ウクライナの国立大学 Kyiv-Mohyla

Academy で政治学の学士号、スウェーデンの Lund University で社会学の修士号、その後インディアナ大学で医療人類学の博士号を取得。研究対象は、不妊、生殖補助医療と新しい親族関係、人間の臓器・細胞・組織の売買と商品化など。

論文：

Polina Vlasenko 2013 Biopower and Precarity: Meeting Embodied Self in the Discourses of ART in Ukraine.

Polina Vlasenko 2014 Governing through precarity: The experience of infertile bodies in IVF treatment in Ukraine. *The Journal of Social Policy Studies* 12 (3):441-454.

Polina Vlasenko 2015 Desirable bodies: Precarious laborers- Ukrainian egg donors in context of transnational fertility. *(In)fertile Citizens* (IV):197-216.

Polina Vlasenko 2021 Global Circuits of Fertility: The Political Economy of the Ukrainian Ova Market. *ProQuest Dissertations and Theses*. Indiana: ProQuest Dissertations Publishing.

記事:

Polina Vlasenko, Ukraine's surrogate mothers struggle under quarantine. *Open Democracy* 10 June 2020.